

〔随筆〕

## 漢字と色彩

鷺野正明

一

最近「ウマ」が人気で、ゲームを楽しむだけでなく、実際に競馬場に足を運んだり、往年の名馬の映像を見たり、引退した名馬を遠くの牧場に尋ねたりする若い女性を見かける。馬は有史以来農耕に戦争にと常に身近にいた動物だったが、女性との接点を記す文献は少ない。すぐに思い浮かぶ詩では、唐の杜審言の「戯れに趙使君の美人に贈る」がある。「石榴模様の裙」を穿いた女性が「桃花の馬」にまたがって行くことが詠われている。ちょうど則天武後の時代で、価値観が新しく変わっていった時代である。しかし、盛唐以降、宋元明清にわたって馬に跨る女性はほとんど詠われない。杜審言は杜甫の祖父にあたる。

紅白粉と青い三日月眉が楚の雲と照り映え

紅粉青娥 楚雲に映ず

桃花の馬上には石榴模様の裙

桃花の馬上 石榴の裙

美しい羅敷はご主人のいる東方へと去って行く

羅敷ひとり 東方に向って去る

私も彼の人を見習って太守となりたいものだ

謾りに他家を学んで使君と作らん

「桃花の馬」は、白い毛色に紅い点々の入った馬という。北周時代の庾信の「燕歌行」に「桃花の顔色は好き馬の如し」とある。唐代では良馬に「桃花、叱撥」と呼ばれる馬がいた。北宋時代の『広韻』に「駉は桃花色の馬」とある。「駉」は日本では「しらかげ」といい、黄色の毛と白い毛の混じり合った馬である。「羅敷」は樂府の「陌上桑」に登場する美女の名で、詩で美女を言うときによくこの名を用いる。

二

馬はいつも身近にいて重要な動物だったことから、中国最古の詩集『詩経』魯頌「駉」に、たくましい馬を列挙してその繁殖を祈る詩がある。四章あるうちの、其の一。

たくましき牡馬  
 遙かなる<sup>けい</sup> 垆の野にあり  
 たくましきもの  
 驪<sup>きつ</sup>（白袴の黒い馬）<sup>こう</sup> 皇（黄白の馬）  
 驪<sup>り</sup>（純黒の馬）<sup>こう</sup> 黄（黄赤の馬）  
 車に駕すれば<sup>ほうほう</sup> 彭彭たり  
 思うこと限りなし  
 馬はかくよからんと

駟<sup>けいけい</sup> 駟<sup>ぼ</sup> たる牡馬  
 垆<sup>けい</sup> の野<sup>や</sup> に在<sup>あ</sup> り  
 薄<sup>しばら</sup> く言<sup>こと</sup> に駟<sup>けい</sup> たる者<sup>もの</sup>  
 驪<sup>きつ</sup> 有<sup>あ</sup> り 皇<sup>こう</sup> 有<sup>あ</sup> り  
 驪<sup>り</sup> 有<sup>あ</sup> り 黄<sup>こう</sup> 有<sup>あ</sup> り  
 車<sup>くるま</sup> に以<sup>もち</sup> ふること 彭<sup>ほう</sup> 彭<sup>ほう</sup> たり  
 思<sup>おも</sup> ふこと 疆<sup>かぎ</sup> り 無<sup>な</sup> し  
 馬<sup>うま</sup> の 斯<sup>ここ</sup> に 臧<sup>よ</sup> からんことを

「驪」は、日本では「くろこま」と呼ぶ。古代の人々は、毛色によって馬を見分けていた。これは今も同じで、サラブレッドも毛色によって八種に分類している。『詩経』「駟」の第二章以下は、三句目の「たくましきもの（薄言駟者）」まで全く同じ字句で、次の馬を列挙する二句に毛色の違う馬が詠われ、終わりの三句は韻が合うように文字が少し変わる。馬は各章4頭ずつ、第一章から第4章まですべて16頭詠われる。

|     |                                |                                 |
|-----|--------------------------------|---------------------------------|
| 第二章 | 駟 <sup>すい</sup> 蒼白の馬（あしげ）      | 駟 <sup>ひ</sup> 黄白の馬（しらかげ）       |
|     | 駟 <sup>せい</sup> 赤黄の馬           | 駟 <sup>き</sup> 青黒の馬             |
| 第三章 | 驪 <sup>た</sup> まだら馬            | 駟 <sup>らく</sup> 黒いたてがみの白馬（かわらげ） |
|     | 駟 <sup>りゆう</sup> くりげの馬         | 駟 <sup>らく</sup> 白いたてがみの黒馬       |
| 第四章 | 駟 <sup>いん</sup> 白い毛のまじった浅黒の馬   | 駟 <sup>か</sup> 赤白のまじった馬、つきげ     |
|     | 驪 <sup>たん</sup> 背が黄色の黒馬（くろくりげ） | 魚 <sup>ぎよ</sup> 目の毛の白い馬         |

最後の「魚」は、白を表す「魚目」という色彩語と関連がある。魚の目の周りが白いことからいうが、馬にも「魚」というのがおもしろい。「驪」は「騮」の本字。『詩経』は紀元前1200年ころから紀元前600年くらいまでの詩が集められている。他に

駟<sup>き</sup> 浅黒の馬（あしげ）      駟<sup>はく</sup> 色の不純な馬（まだら）

などもある。辞典には「驪<sup>か</sup>」赤茶色の馬（あかげ）、などもある。解釈は諸説あるが、すでに毛色ごとにそれぞれの馬を言い表す漢字があったことに驚く。

### 三

馬を識別する漢字は毛色を言う馬限定の色彩語である。「桃花の馬」の「桃花」は桃の花を言って紅い色を連想させるので、これも一種の色彩語である。青や赤や黄という直接色を表す色彩語を用いずに色彩を表すのである。同様なことが染

織にも見られる。例えば史游の『急就篇』では繪を染める色について

鬱金（黄）、半見（黄と白の半々）、緗（淡黄）、縹（白色）、緌（蒼艾）、緑（青黄）、紈早（黒）、紫（青赤）、白藟（白素の精なるもの）、蒸栗（黄色）、絹（生白）、紺（深青に赤を含んだ間色）、緋（浅赤色）、紅（あざやかな赤色）、撚（深い赤色）

という。「緑」は青を含んだ黄色であり、「紅」はあざやかな赤色である。色彩は太陽光を反射する波長が色として認識されるので、素材やその質によって色彩が微妙に違ってくる。だから、馬は馬の色としての漢字が、繪は繪の色としての漢字が必要になってくる。（ ）内の色の説明は後世の注釈である。よく見ると、基本の色は青・赤・白・黒・黄である。後にこれを「正色」と言い、それ以外は「間色」と言う。青・赤・白・黒・黄は、方位の、東・南・西・北・中を表し、季節の春・夏・秋・冬とも対応する。「黄」は黄土大地の中国を表す。秋を「白秋」と言うのは色・方位・季節が関連している。

色彩は、馬の毛色のように天然由来のものと、染織のように人の手が加わって創り出されるものとがある。前者には鉱物、玉石、草花などがある。後者には建築や調度品に施す色、釉薬によって出る陶磁器の色、糸を染めて織りなす衣服の色、化粧の色、宝飾の色、酒の色、絵画における顔料などがある。いずれも原材料は天然のモノである。時代が降り、物が溢れ、技術が進歩するにつれて新しい色が作り出され、色彩語も増えていった。明末清初には南京の染め物工房から生み出された「京元」がある。

明代陶宗儀の『南村輟耕録』彩繪法に顔料が挙げられている。青系では

頭青、二青、三青、深中青、浅中青、螺青、蘇青

緑系では

二緑、三緑、花葉緑、枝条緑、南緑、油緑、漆緑

とある。唐の白楽天はバラの花の絵を見て

かすむように枝は石緑色に塗られ 烟条は石緑を塗り  
白いめしべに黄色の点が打たれている 粉蕊は雌黄を撲つ

（裴常侍より薔薇架に題する十八韻を以て示めされ因りて広めて三十韻と為して以て之に和す）

と詠う。緑をただ「緑」と言わずに「石緑」と言い、黄も「雌黄」と言い、より具体的に色合い表現する。「雌黄」は硫黄とヒ素を混ぜた黄色である。昔は黄色い紙に文字を書き、間違うと雌黄を塗って消し、その上に字を書いた。今日ホワ

イトの修正液を使うのと同じである。「雌黄を加える」と言うと、詩文を改竄することを言う。

宋の陸游は、夕暮れの山と春の浦の潮を「螺青」「石緑」で表した。

|                  |   |
|------------------|---|
| 夕暮れの山は所々螺青色となり   | <small>ら せい ぼ ざん</small><br>螺青は暮山の色を点出し           |
| 春の浦の潮は石緑色に染めなされる | <small>せ き りょく し ゅん ぼ</small><br>石緑は春浦の潮を染め成す(旅游) |

「石緑」は深い緑色であり、「螺青」はそれよりも更に深い色である。色見本があれば一目瞭然であるが、言葉だけで説明するとなると、基本の色より暗いか明るいのか、〇〇の色が混じっている、などと言うしかない。何とも、もどかしい。ちなみに『南村輟耕録』彩絵法には以下の顔料も挙げられている。

黄丹、飛丹、三朱、土朱、銀朱、枝紅、紫花、藤黄、槐花、削粉、石榴、顆綿、燕支、檀子

「石榴」は「石榴の馬」のように馬にも使われていた。ざくろのような赤い色である。

衣服の色で「月白」という色もある。詩で「月白」とあれば「月が白い」という意味であるが、染物では淡青色を表す。陶芸関係にも「月白」があり、陶芸家によって「月白」の解釈が違うようだ。土や釉薬が異なれば色合いが微妙に異なるのは当然である。藍（青）系統の色は、藍の浅いものから濃いものへと並べると

げつぱく 月白 → ひんげつ 品月 → らん 藍 → せきせい 石青

となる。なお「淡い」を表す語に

窃、盗、小、退（褪）、柔（揉）

がある。また、色彩を形容する語に、

暗さ 油、玄、悶

明るさ 鮮、翠、銀

がある。

#### 四

国の名前が付く色もある。戦国時代、斉の桓公が紫色の着物を好んだことから「齊紫」と呼ばれた。『韓非子』に出る話で、斉王が紫の着物を好んだことから、斉の人が皆それを好むようになり、白地五着分でも紫地は一着も買えないほど高くなった。王が心配したので、師傅が説いて言った。「『詩経』に君主が自ら行わないと民は信用しないと、あります。民が紫の着物を着ないようにしたいとお思いなら、王がまず紫の着物を脱いで朝廷にお出ましなさい。群臣が紫の着物を着ていたら『もっと遠ざかっておれ、わしはその臭いが嫌いだ』と言われなさい」。

王が言われたとおりにすると、その日のうちに近侍の官で紫を着るものがいなくなり、その月のうちに都城で着るものがいなくなり、その年のうちに領域で着るものがいなくなった」と。

人の姓が付く色もある。唐の時代、牡丹の花が愛され、そのなかに「魏紅<sup>ぎこう</sup>」という牡丹があった。宋の欧陽脩の『洛陽牡丹記』に「魏家の花は千の葉に淡紅色、魏丞相の仁浦家から出る」といい、『洛陽牡丹図』では「当時の絶品は魏紅<sup>ぎこう</sup>、窈窕<sup>ようちよう</sup>、姚黄妃<sup>ようこうひ</sup>」とある。

「魏紫<sup>ぎし</sup>」もある。洛陽牡丹の「魏紅」を品種改良したもので「都勝<sup>としょう</sup>」ともいう。周師厚の『洛陽花木記』に「近年また勝魏、都勝の二種がでる。勝魏は魏花に比べてやや色が濃い。都勝は魏花に比べてやや大きく、葉はかすかに紫紅を帯びている」とある。余鵬年の『曹州牡丹譜』には「魏紫は、紫の胎に肥えた茎、枝の上の葉は深緑で大きく、花は紫紅」という。赤の顔料は、「茜草<sup>あかね</sup>」がその原料であるが、澱に一度浸した淡紅を「縹<sup>げん</sup>」、二度浸した赤を「赭<sup>てい</sup>」、さらに浸した赤を「纁<sup>くん</sup>」と言う。

褐色は『碎金<sup>さいきん</sup>』に

金茶褐<sup>きんちやく</sup>、秋茶褐<sup>しゅうちやく</sup>、醬茶褐<sup>しょうちやく</sup>、沈香褐<sup>じんこう</sup>、鷹背褐<sup>ようはい</sup>、磚褐<sup>せんかく</sup>、豆青褐<sup>とうせい</sup>、葱白褐<sup>そうはく</sup>、枯竹褐<sup>こちく</sup>、珠子褐<sup>しゅし</sup>、  
 褐<sup>かく</sup>、迎霜褐<sup>げいそう</sup>、藕糸褐<sup>ぐうしかつ</sup>、茶緑褐<sup>ちやくりよく</sup>、葡萄褐<sup>ぶどう</sup>、褐油粟<sup>かつゆうぞく</sup>、檀褐<sup>だん</sup>、荊褐<sup>けい</sup>、艾褐<sup>がい</sup>、銀褐<sup>ぎん</sup>、駝褐<sup>だ</sup>

とある。「〇〇褐」とあるので、その由来が分かり、色彩も想像できる。糸を染める場合や、絵具の顔料とする場合など、その色を出す方法が『天工開物』や『南村輟耕録』などに見える。ともに明代の書である。

清代になると、建物や服飾、化粧、料理などが、色彩とともに細かく描かれる『紅樓夢<sup>こうろうむ</sup>』が出現する。例えば第89回に、詩を書き終えた黛玉<sup>たいぎよく</sup>の容姿を次のようにいう。

黛玉は刺繡を施した月白<sup>げつぱく</sup>（淡青色）の毛の短い毛皮を着て、上から銀鼠<sup>しろりす</sup>のチョッキをつけ、髪は通常の雲髻<sup>うんげい</sup>（雲のように結い上げた髻）に結い、花模様のない純金の扁平な簪<sup>かんざし</sup>を一本挿し、刺繡を施した楊妃色<sup>ようひいろ</sup>（薄紅色）の綿のスカートを着ている。

## 五

時代が降るにつれて技術が進歩して新たな色が生み出され、色彩語が増え、詩文はそれらの色彩語を取り入れて情景をより精彩に描写できるようになった。漢字は、活字でも墨書でも黒一色であるが、多くの色彩語があり、また馬のように漢字そのもののなかに色彩が隠れている。そう思って漢詩や漢文を読むと四角四

面の黒い世界から、突然美しい色彩があふれ出てくる。何と楽しいことではないか。

今日ではコンピューターによって無限に色が作り出せる。また同じ色が確実に再現でき、モニターで見たり、紙や繊維はもちろんのこと木や金属やプラスチックなどいろいろなものに着色できる。無限に生まれる色はCMYKやRGBで表される。便利な世の中になった。

日本では色彩研究が早くから行われ大きな成果をあげている。中国でも近年色彩研究が進み、中国の膨大な古典の中の色彩語と現存するモノの色から、色彩を特定し、分類し、色彩語のない色には新たに名前をつけている。もちろんそれらの色彩もCMYKやRGBで表され、色見本がついている。

難しい漢字も、漢詩・漢文も、無限の美しい世界を秘めている。読まない手はない。

（わしの まさあき・教授）